

児童画による国際交流・対ヨーロッパ諸国・昭和30年代 — 公文書による —

A Study on the International Exchange through Children's Drawings
Between Japan and European Nations in the Syowa 30's
- Based on the Official Documents -

草 尾 和 之

Kazuyuki KUSAO

美術教育講座

(平成18年10月2日受理)

The Diplomatic Record Office of the Ministry of Foreign Affairs (Azabudai 1-5-3, Minato-ku, Tokyo) opened the files of diplomatic documents to the public on June 15, 1998.

It is the 14th opening in total to the public. I investigated "I'-1-5-4-5" which was one of those files. As a result, I discovered the documents concerning the international exchange of the children's works between Japan and European nations in the Syowa 30's.

They are concerning the following seven.

1. Prize giving type in Manchester in 1957
2. Presentation of children's drawings of Tokyo to Sweden by Ohina who is assembly member in Tokyo in 1958
3. Exhibition of children's drawings sent from Tokyo in Copenhagen Palacio Municipal (holding year uncertainty)
4. Exchange of children's drawings between Yamanashi Pref. and Vaud Kanton Switzerland in 1958
5. Opinion of the Ministry of Foreign Affairs concerning the international exchange through children's drawings between Japan and Soviet in 1961.
6. Request of Exhibition from Nottingham university in Britain in 1955
7. "International Exhibition of Children's Art and Crafts 1958" sponsored by the Daily Worker in Britain

はじめに

外務省外交史料館¹⁾の平成9年度外交記録公開(平成10年²⁾6月15日《月》付, 通算第14回公開)によって初めて公開された文書ファイルの1つに『学生・生徒及び児童作品展覧会関係雑件(Ⅰ' 門1類5項4目5号)』がある³⁾。これは2巻のファイルからなる。2巻を通して国別に22の見出しが設けられ, それぞれに文書が発行日付順に綴じられてい

る。

私はこれを調査・考察し、これまで「福岡教育大学紀要」に3つの論文を発表してきた⁴⁾⁵⁾⁶⁾。本稿はそれに続くもので、同じく前掲の公文書ファイルを研究対象とし、日本とヨーロッパ諸国⁷⁾との間における昭和30年代の児童画による国際交流事業を調査・考察するものである。なお、研究対象となる前掲の公文書ファイルから見い出すことのできた事業は合計7件であるが、本稿では国別や時間順ではなくファイルに綴じられた順に扱うこととする。また「文書1-1」「文書1-2」などの名称は、文章が煩雑になるのをさけるため、本稿筆者が本稿内に限り仮に付けたものである。

1. 昭和32年、マンチェスターにおける賞品授与式（日本ユネスコ美術教育連盟主催国際児童画展）

ファイルの第2番目に「本邦」という見出しがあり、その中に昭和32年にイギリスのマンチェスターで行われた「日本ユネスコ美術教育連盟主催国際児童画展」の賞品授与式に関する文書が収められている。それは次の2件である。

◆「文書1-1」第1412号 昭和32年10月10日

在連合王国特命全権大使西春彦名義、外務大臣藤山愛一郎あて

「わが国における国第児童画展に入賞した英国児童に対する賞品授与に関する件」

◆「文書1-2」情三第1759号 昭和32年11月1日

外務省情報文化局長名義

日本ユネスコ美術教育連盟事務局長あて

「日本ユネスコ美術教育連盟主催国際児童画展の件」

「文書1-1」により、次のことがわかる。

昭和32年に日本で開催された「日本ユネスコ美術教育連盟主催国際児童画展」に英国から出品したマンチェスター在住の児童3名がそれぞれ、ユネスコ日本国内委員会会長賞、毎日新聞賞、ユネスコ芸術教育連盟賞を受賞した。

在連合王国日本国大使館はこの間の事情については関知していなかった。ところが英国の文部省から同館に対し連絡があり、大使夫人から受賞者に賞品授与をしてもらいたいとの依頼があった。そこで大使は9月20日に「係官」と共に夫人をマンチェスターに出張させ、「市長教育関係者等三十余名列席の下にタウンホールにおいて賞品を授与」させた。

さらにその結果を「繊維産業の競争関係からわが国に対する感情良好ならざる該地方において、市長主催の下にこの種の催しが行なわれたことは対日感情の融和に些か資するところあったものと思われる」と評価して「文書1-1」に続けて記している。また同館がこの展覧会については英国文部省から連絡があるまで関知していなかったことから、「なおわが国におけるこの種国際的催しで当国より参加者ある場合は一応後通報相煩わしい」と書き添えており、これは同館が児童画による国際交流事業の外交上の効果を再認識したとも解釈できる。

東京の外務省本省ではこの「文書1-1」を承けて、日本ユネスコ美術教育連盟事務局長と日本ユネスコ国内委員会事務局長にあて「文書1-2」を発行し、「文書1-1」の連絡があったことを伝えた⁸⁾。また、在連合王国日本国大使館からの要望どおり、「(略)この種催しの企画に際しては、事前に当方に連絡されるよう留意ありた」と申し添えた。

本件では、在英日本国大使館が児童画による国際交流事業を貿易摩擦に対する効果という点で認めている点に注目したい。1960年代初頭（昭和30年代半ば）には日本と欧米諸国との間に主に繊維産業に関していわゆる貿易摩擦が発生しており、この事業はその経済と政治の外交環境を背景としているのである。

2. 昭和33年、東京都議会議員大日向薫次（おおひなつたじ）による事業

ファイルの第15番目に「スウェーデン」という見出しがあり、ここに昭和33年に東京都の都議会議員が小中学生の図画を携行したことに關する文書が収められている。それは次の1件である。

◆「文書2－1」電信 平第75号 昭和33年7月12日13時40分発
在スウェーデン島大使宛、藤山大臣発
「小中学児童図画交換に關する件」

上の文書により、次のことがわかる。

東京都議会議員大日向薫次がスウェーデンでの国際行事に出席する際、東京都内小中学生の図画約200枚を携行した。外務省本省は在スウェーデン日本国大使館にあて、以下の電信「文書2－1」を発した。

依頼報

山田次官より

軍縮と国際協力世界大会出席の大日向薫次東京都会議員は当地小中学生図画^{スガ}と交換し、親善交流をはかるため、東京都都内小中学児童図画約二〇〇枚を携行する趣につき、ストックホルム市当局との連絡その他可能な範囲で宜しく願います。

海外への出国が制限されていた時代にあつては、海外への渡航者に児童画の国際交換が託される例も多い。その渡航者は教育関係者とは限らないし、渡航目的も教育関係とは限らなかった。本件はその一例である。なおこののち、作品が実際にストックホルム市に寄贈されたのか等、本電信のみでは不明である。

3. （年不詳）、コペンハーゲン市庁舎における東京都児童の絵画展示

ファイルの第16番目に「デンマーク」という見出しがあり、ここに東京都の児童画がデンマークに送付されたことに關する文書が収められている。それは次の1件である。

◆「文書3－1」電信写 総第36390号 平 情文
コペンハーゲン12月10日16：50発、本省11日02：23着
外務大臣あて、近藤大使名義
「東京都の児童画国際交換に關する件」
第336号

以下に全文を引用する。

往信第630号に関し

当地関係者より東京都児童画展示会場としてコペンハーゲン市庁舎中央ホールを明年1月11日より18日まで留保済みの由にて現品の当地到着予定月日及び積込み船名を照会越した。右至急お取調の上、結果折返し御回電ありたい。なお当国児童画の発送手配は完了した由。委細公信。

いかなる経緯によって、東京都児童の絵画がコペンハーゲンにおいて展示されることになったのか、本文書だけでは不明である。

また、昭和何年の文書であるのかも不明である。「(16) デンマーク」の見出しには、この文書1件しか綴じられていないので、前後の文書の日付から推定することもできない。「文書番号(総第36390号)」の前に「38」と書き込みがあるので、昭和38年の文書かとも考えたが、本資料ファイルは昭和27年8月から昭和35年12月までの文書を収めたものであり、それはいえない。

4. 昭和33年、国際農友会派遣農業実習生三井大典による山梨県小中学校児童生徒作成絵画とスイス・ヴォー州児童作品との交換、山梨日々新聞での紙上展

ファイルの第18番目に「スイス」という見出しがあり、ここに、昭和33年に研修のためスイスを訪れた三井大典が児童画の国際交換の仲介をしたことに関する文書が収められている。それは次の5件である。

◆「文書4-1」第382号昭和33年5月22日付け

外務大臣藤山愛一郎あて、在スイス日本国大使館特命全権大使奥村勝蔵名義
「スイス児童画の転送方依頼に関する件」

◆「文書4-2」昭和33年9月25日付け書簡

情報文化局長近藤晋一あて、山梨県北巨摩郡長坂町長坂三井大典名義

◆「文書4-3」山梨日日新聞昭和33年9月14日日曜日付け 第5面

◆「文書4-4」(名刺)山梨日々新聞東京支社小林静夫

◆「文書4-5」受領表 昭和33年9月2日付け

外務省情報局課あて、受取人三井大典代理人山梨日々新聞社東京支社小林静夫名義

上の文書により、次のことがわかる。

農業の研修のためスイスに派遣された山梨県民の三井大典が、同県の小中学生の絵画を携行し、スイス児童の絵画との交換を試みた。この経緯は「文書4-1」によってわかる。以下に引用する。

国際農友会派遣の農業実習生として昨年度当国農村に於いて研修を了した山梨県人三井大典は、当国出発に先立ち、山梨県小中学校児童作製の絵画約百点を当館に提出、スイス児童(ヴォー州)の作品と交換の上本邦にもち帰り度き旨申し出たので、須山参事官に於いてローザンス市所在の「学校美術委員会」(Comité de l' Art à l' Ecole) 会長Maurice Perrenoud に対して右日本側作品を交付の上、交換斡旋方依頼しておいたところ、この程ようやく、右ベルヌーより、スイス児童画数十点を送付越した。しかるに前記三井はすでに五月初旬デンマークより帰国せる趣なので、右ス

イス児童画は、別途船便を以て送付するにつき、到着の上は、左記三井の現住所宛転送方相煩わし度い。

記

山梨県北巨摩郡長坂町 三井大典

上において、在スイス日本国大使館が東京の本省に依頼したとおり、帰国した三井大典に外務省経由でスイスの児童画が届けられた。そこで三井が外務省情報文化局長に宛てて出した礼状が文書「4－2」である。つぎに引用する。

謹啓

秋冷の候愈々御健勝の御事と御拝察申し上げます。扱この度はスイス児童画送付に關しては、種々お世話に預りまして大変有難たうございました。二十九点無事受領致しました。なにかと御協力賜りましたスイス大使館にくれぐれもよろしくお伝へ下さいます様お願い申し上げます。児童画は今後山梨の文化向上の為大いに利用致したい考でございます。別紙同封の郷土紙「山日」へ掲載致しましたので御拝見なさって下さい。尚この児童画は山梨県の方へ保管をお願いし各地で展覧会など開催していただく予定であります。又その後の使用状況などに付きましては御報告申し上げます。種々御手数をわざわざしました、情報文化局文化課の柘植事務官には厚く感謝を申し上げます。次第です。くれぐれもよろしくお伝へ下さいます様お願い申し上げます。

敬具

九月二十三日

山梨県北巨摩郡長坂町長坂 三井大典

情報文化局長
近藤普一殿

これによりスイスから三井に贈られた児童画は29点であることがわかる。三井はここで「児童画は今後山梨の文化向上の為大いに利用致したい考でございます」と述べている。また送付を受けたスイスの児童画が地元の山梨日日新聞に「紙上展覧会」として掲載され、その記事を同封している（「文書4－3」）。また「スイスのお友だちの絵」という見出しで6点の作品の図版が掲載され、山梨大学の堀内孝恵が説明文を書いている。

「文書4－2」には、さらにその後のこととして「この児童画は山梨県の方へ保管をお願いし各地で展覧会など開催していただく予定であります。又その後の使用状況などに付きましては御報告申し上げます」と書いているが、実現したか否か、それ以上は不明である。

5. 昭和36年、日ソ間の児童画交換に関する外務省の見解

ファイルの第22番目に「ソ連」という見出しがあり、日本とソビエト連邦との間での児童画の国際交換について、昭和36年に外務省が示した見解を知ることができる文書が収められている。それは次の1件である。

◆「文書5－1」昭和36年6月15日付 東欧課 「日ソ児童画交換に関する件」

上の文書により、次のことがわかる。

山田久就がソビエト連邦に大使として赴任するに際し、山田の郷里である富山県福野町の小学校において、この機会にソビエト連邦の小学生と図画の交換を行いたいとの要望が出て来た。そこでそのあっせんをしてもらえるか、外務省に問い合わせがあった。東欧課で検討した結果、次の見解に至った。「文書5-1」から引用する。

1. 本件児童画交換を外務省があっせんするに際して、之が山田大使の郷里の小学校の児童のかいた画であるということで、大使の個人的な事柄であるとの色彩を強く出して取扱うことにすれば問題はない。
2. 但し児童画交換の範囲を拡げて、広く一般小学生から募集してソ側と交換を行うことになると政府主催の日ソ文化交流の行事の形となり、現在交渉中の日ソ文化交流取極に対するわが方の立場に抵触する惧れがあるので、この点については現在の所は消極的態度をとる。

この文書は、東欧課長のほか、欧亜局長、総務参事官、条約課長、文化課長を経ている。児童画の交換であっても、またそれを行う者が外務省の大使であっても、国交関係や政治情勢によってはそれらと無関係ではないということがわかる1例である。

6. 昭和30年、ノッティンガム大学からの出品依頼

ファイルの第24番目に「英国」という見出しがあり、ここに昭和30年にイギリスのノッティンガム大学教育研究所が在英国日本国大使館に日本の児童作品の寄贈を依頼をしたことに関する文書が収められている。それは次の2件である。

◆「文書6-1」第1830号公信写 昭和30年12月8日付
在連合王国特命全権大使西春彦名義、外務大臣重光葵あて
「児童絵画・手工品送付方依頼に関する件」

◆「文書6-2」情三第534号 昭和30年12月23日附
受信人名 文部省調査局長、 発信人名 情報文化局長
「児童絵画および手工品等出品方の件」

上の文書により、次のことがわかる。

1955年12月5日付け、M.M.Lewis署名の書簡により、英国のノッティンガム大学教育研究所（University of Nottingham, Institute of Education）から在連合王国日本国大使館に対し、翌昭和31年の適当な時期に開催を予定している各国学童絵画および手工芸品展覧会に、日本からも代表的な絵画と、木工、金工、陶芸、手芸などの手工品等を出品してほしいと要請があった⁹⁾。

要請を受けた同館は、「右については従来とも欧米諸国はそれぞれ同様の企てに協力してきた由であり、極めて有意義であると思われるので、右展示品の送付につき好意あるご配慮を得たく特にお願ひする」と「文書6-1」で本省に要請した。

この文書によって、児童画による国際交流が欧米諸国においては従来から行われていること、また極めて有意義であることを同館が認識しており、同館でも積極的に取り組んでいきたいという意味を読み取ることができる。

上の内容を記した「文書6-1」を受けた外務省本省は文部省に対して「文書6-2」を発行し、「当方としては出来るだけ参加い^(ママ)太^(ママ)し太^(ママ)いと思考している（略）」として、絵画

70点、手工品25点程度を収集し、リストを添付して外務省まで送付してほしいと要請した。

7. 昭和33年、デイリー・ワーカー主催国際児童絵画手工展覧会

ファイルの第24番目に「英国」という見出しがあり、ここに、デイリー・ワーカー（Daily Worker）紙¹⁰⁾主催の国際児童絵画手工展に関する文書が収められている。それは次の2件である¹¹⁾。

◆「文書7-1」第587号 昭和33年3月29日付け

在連合王国臨時代理大使中川融名義、外務大臣藤山愛一郎あて

「『デイリー・ワーカー』主催国際児童絵画手工展覧会に関する件」

◆「文書7-2」情三第212号 昭和33年5月6日附

受信人名 在連合王国中川臨時代理大使、 発信人名 藤山大臣

「『デイリー・ワーカー』主催国際児童画展に関する件」

上の文書により、次のことがわかる。

児童画の国際交換についてその意義の理解のしかたや程度は、在外公館ごとに、あるいは大使以下の外交官や担当職員により、実にさまざまである。本件の場合、大使館が仲介の労をとることについて、文書作成者はあまり望んでいないようである。また、政治上の理由で交換事業が制限を受けることもあるが、本件の文書においてもそれを示している。

長くなるが、「文書7-1」を引用する。

一、今般 International Exhibition of Children's Art & Crafts 1958 事務局より別添書簡の通り本件展覧会参加に関しわが国の森永母を讃える会及びユネスコ美術教育連盟より照会があったが締切日は来る五月十四日である旨右両団体に対し注意を喚起せられたい旨依頼越した。

二、右書簡によれば前記のわが国二団体と本件展覧会事務局との間には既に書簡による連絡が有ったものと認められるが、英国におけるこの種催物にわが国より参加する場合には、結局当館において種々の面倒を見ることになるのは過去の実例に徴するも明らかであるので、この種催物の参加についてはその準備段階から本省を通じて当館に連絡するよう出来る限り御指導相煩わしたい。

三、固より本省においても公私のあらゆる団体に対し右のごとき指導を与えられることの不可能なことは承知致しおるも森永母を讃える会は屢次の公信をもって御報告済みのとおり、児童の母の肖像の展覧会に関し毎年本省及び当館に最も面倒をかけおる団体であって、今回のごとき場合には当然本省に連絡すべきであったと思われる。

四、さらに本件展覧会の主催者「デイリー・ワーカー」であり、同紙が共産党機関紙であることは周知の事実である。当館としては（純然たる報道関係は止むを得ずとするも）同紙との連絡は好ましくないと思われるのでこの点特に前記両団体に御連絡相煩わしたい。

上の「文書7-1」において、在連合王国日本国大使館は「英国におけるこの種催物にわが国より参加する場合には、結局当館において種々の面倒を見ることになるのは過去の実例に徴するも明らかである」と記していることに留意したい。場合にもよろうが在外公

館が児童画交換による国際交流事業に対して便宜をはかる場合、事実上の実行者とならざるを得ないこともあったのかもしれない。また、在外公館ごとに、あるいはその在外公館が所在する国の文化によって、あるいは担当する外交官によって、対応はさまざまである。

在連合王国日本国大使館からの連絡「文書7-1」に対し、外務省本省が同館に回答したのが「文書7-2」である。これも長くなるが次に引用する。

三月二十九日付貴信第五八七号に関し、森永「母をたたえる会」および日本ユネスコ美術教育連盟に貴信の趣を伝達し、注意を喚起するとともに本件真疑につき照会したところ、

一、森永「母をたたえる会」においては、別添甲号（写）をもって突然「デイリーワーカー」紙から督促があったところ、森永では本件につき何ら承知していなかったが本件主催者の性格その他につき本邦の美術関係方面に照会したところ、本展審査に当る多くの審査員中、Sir Herbert Read およびMr.R.R.Tomlinson の両氏は、わが国美術界でも非常によく知られており、本展の趣旨も結構で、「母をたたえる会」としては本件展に参加するようすすめられたので、森永ではとりあえず別添（乙号）のごとく回答するとともに都内小、中学校に対し本展への出品方依頼した由。しかしながらその後、学期末の休暇のためほとんど応募者がなかったため、結局見合わせることにし、このほど右の趣を主催者へ返答した由である。

二、他方日本ユネスコ美術教育連盟に照会したところデーリー・ワーカー紙は同連盟は同連盟に対しても別添（丙号）のとおり前記と同様趣旨の参加方要望があり、同連盟も本件展の性格はよく承知していないが、これまた美術関係者に照会の結果参加することにし、（別添丁号）客年全国から収集した児童画中より優秀作品九十点を三月二十七日船便で主催者あて直接送付した趣である。

上の「文書7-2」の前半には、「森永母をたたえる会」¹²⁾が主催者からの参加要請に答えようとしたものの「学期末の休暇のためほとんど応募者がなかった」ため応じられなかったという事情が書かれている。外務省外交文書館の史料を調査していると、昭和の戦前期、戦後期を通じて児童画の交換による国際交流事業においては、相手国あるいは日本の学校が夏休みなど長期休暇中に入っていることが作品収集の障害になることがしばしばあって、これもその1つの例である。

さらに「文書7-1」と「文書7-2」で共通して確認できるのは、在連合王国日本国大使館は展覧会的主催者がイギリス共産党の機関紙であることを理由に協力を躊躇したということである。一方、主催者から出品を要請された日本の2機関は、審査員にH.リードおよびR.トムリンソンの名があることから展覧会に協力することを決めている。両名は文書中にもあるとおり、こんにちにおいても美術教育学に欠くことのできない主要な人物であるが、両名の東西冷戦下における身の処し方という点でも興味深い一場面である。

おわりに

本稿で取り上げることができた事業7件は、児童画による国際交流事業から見た美術教育史という観点からそれぞれ重要な内容を含んでいる。また美術教育は社会においていかなる機能を果たし、位置付けられてきたのか、またその重要性はいかに認識されてきたの

かということを考察するためにも重要な内容を含んでいる。3点にまとめて述べたい。

1点目は、同じ在外公館の、児童画による国際古流事業に対する姿勢の変化についてである。

本稿で取り上げた7件の事業のうち、3件は在連合王国日本国大使館が仲介の労をとったものである。本稿では7件をファイルに綴じられた順に扱ったので、該当する3件を時間順に直して記すと、6件目と1件目と7件目の事業である。

本稿で6件目に取り上げた事業では、児童画による国際交流は欧米諸国では従来から一般的なことであり、かつ極めて有意義なことであることを在連合王国日本国大使館が本省に対し文書中で説明していることに注目したい。

本稿6件目の事業に続く本稿1件目の事業に関する文書においては、児童画による国際交流事業に対し、在連合王国日本国大使館が貿易摩擦を緩和する効果を認めていることが確認できた。

ところが同館は本稿7件目の事業に関しては、児童画による国際交流事業の仲介に関して消極的な態度に転じている。7件目の事業は1件目の事業のわずか半年後のことである。

この間、大使が特命全権大使西春彦から臨時代理大使中川融に交替している。「文書1-1」には大使夫人が「本使妻」と表現されており、この文書が名義だけでなく大使本人により起案されたものである可能性がある。とすれば本稿6件目と1件目に関するそれぞれの文書に記された児童画による国際交流についての認識も意欲も、同館の西春彦特命全権大使個人の認識と意欲が反映したものであったのかもしれない。そして大使の交替に伴って大使館としての対応も変わったと考えることもできる。一方また、1件目の事業に関する「文書1-1」には、欄外に「当方に連絡なく如何なる団体が企画したものか承知していない」との書き込みがあり、西春彦特命全権大使の在職中においても、主催者によって対応を変えることが必要であると考えられていたのかもしれない。いずれにしても想像の範囲内で決定的な判断材料はない。

2点目は、児童画による国際交流事業と東西冷戦との関係である。

本稿で取り上げた5件目と7件目の事業においては、東西冷戦下における外務省の慎重な姿勢が見て取られる。児童画による国際交流といえども、国交関係や政治情勢によってはそれらと無関係ではないということが確認できた。

3点目は、海外への渡航者に仲介を託すという方法で行われた例がやはり見られることで、これは本稿の2件目と4件目が相当する。この場合、託す側と託される側がいかなる関係を持っていたのかを追調査しなければならないのであるが、今回は果たせなかった。

最後に付け足して、7件目の事業に出てくる「森永母をたたえる会」について述べておきたい。

在連合王国日本国大使館から外務省本省への文書¹³⁾に「森永母を讃える会は屢次の公信をもって御報告済みのとおり、児童の母の肖像の展覧会に関し毎年本省及び当館に最も面倒をかけおる団体」と批判的に記されている。公文書にこれほど直裁に表現されているのは珍しいことである。「森永母をたたえる会」は当時毎年、国際的な児童画展を開催しており、外務省外交史料館にも同会関係だけの文書をまとめたファイルが複数冊残されている。それだけ外務省としても多くの力を割いて同会に協力しつつあったということであるが、在外公館によっては別な意見もあったことがわかった。なお、「森永母をたたえる会」の行った児童画による国際交流事業については後日、稿をしたための予定である。

《註》

- 1) 東京都港区麻布台 1 - 5 - 3
- 2) 平成 9 年度の事業であるが、実際に公開されたのは平成 10 年度である。
- 3) 公開はマイクロフィルムによる。
- 4) 「アジア・アフリカ民族展覧会（昭和 33 年）－公文書による児童画国際交換の研究－」，平成 16 年 2 月，「福岡教育大学紀要」第 53 号第 5 分冊，福岡教育大学
- 5) 「児童画による国際交流・対中南米諸国・昭和 30 年代－公文書による－」，平成 17 年 2 月「福岡教育大学紀要」第 54 号第 5 分冊，福岡教育大学
- 6) 「児童画の国際交換・対ドイツ連邦共和国・昭和 30 年代－公文書による－」，平成 18 年 2 月「福岡教育大学紀要」第 55 号第 5 分冊，福岡教育大学
- 7) ドイツ連邦共和国との間の事業については前掲 6) で取り上げたので除く。また，フランス共和国との間の事業に関しては，今後に別稿を立てる予定であるので，本稿の対象からは除く。
- 8) 「文書 1 - 2」によると，他にナイジェリアの在ラゴス日本国領事館（現在の在ラゴス出張駐在官事務所）からも本省に対してこの展覧会に関する通知があったことがわかる（文書はファイルに綴じられていない）。
- 9) 「文書 6 - 1」「文書 6 - 2」のほか，この要請の文書（英文）もファイルに綴じられているが，今回は訳せなかった。
- 10) 発行者：イギリス共産党（The Organ Of The Communist Party Of Great Britain），出版地：ロンドン，創刊年：1930，終刊年：1966，刊行頻度：日刊
- 11) ほかに英文の文書が 7 件，ファイルに綴じられている。今回は訳せなかった。主催者からの出品要請や展覧会の要項，審査員の一覧などを含んでおり，この事業がより詳しくわかるはずである。訳出の上，あらためて稿をおこしたい。
- 12) 東京都港区芝田町 1 丁目 12 番地（史料ファイル 1 番目の見出し「本邦」内に綴じられた他の事業に関する文書による）
- 13) 「文書 7 - 1」